

# ケアマネだから できること

～学びへの関わり～

**木村晃子**

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

## ケアマネ 時々 講師のしごと

私の本業はケアマネです。高齢者支援の場で日々実践を展開しています。そんな私が、時々「講師」という仕事を引き受けることがあります。連載12でお伝えした認知症サポーター養成講座では、地域のあらゆる世代を対象にした、「認知症を理解し、認知症の人に手助けできるサポーターを養成する講座」です。年に数回、仲間と一緒に小学生や一般住民を対象に講座を行っています。この講座には、所定のテキストがあり、内容の雛形はだいたい決まっています。ただし、小学生を対象にした授業などでは、寸劇を入れるなどの工夫をしながら、小学生でも飽きずに授業に参加できるように工夫をしています。

その他には、前号（連載14）でお伝えした、「家族を理解し支援する」という内容での学習会、研修会での講師を担当しています。これは主にワークショップ形式です。面接や事例検討など、演習中心のスタイルです。このトレーニングは、年に2回、団士郎先生の家族理解ワークショップを受けている私が、先生の技を盗みながら、地域の仲間と行っていることです。

このように、純粋なケアマネ業務の他に、高齢

者支援の現場から、あるいは家族を支援するという切り口での「講師」という仕事も時々担っています。今回の連載では、先日初めて引き受けた、大学生への「地域福祉論」の授業の様子をお伝えしたいと思います。

## 興味がないだろう、という層へ教える

大学生への授業は私の人生では初めてのことでした。私の学歴は高卒ですから、もちろん大学の授業というのは想像もつきません。しかも、看護や福祉という、自分の経験にある学部ではありません。そこでの地域福祉の授業。特に私に任せられたのは、高齢者支援の現場から、認知症高齢者の一般的理解と専門職としての理解、というのが学習の狙いでした。

最初に、大学での授業経験のある先輩へ、大学の授業とはどのようなものか情報収集を行いました。それによると、いわゆるテレビでみるような階段式の教室で、けっこうな人数の生徒がいるけれど、必ずしもこちらの話を聞いているとは限らない、ということでした。講義をしながら、話を聞いてもらえ時に、「心が折れそうになる。」とは講師の正直な気持ちでしょう。そのような事前情

報を元に、自分は与えられた役割をどのように果たそうかを考えました。私は、学生に何を伝えたら良いのだろうか。認知症のことを伝えるのか、高齢者の日常生活を伝えるのか。学生はそこに興味を持つのだろうか。あれこれ考えながら、そもそも地域福祉を学ぶ意味は何なのだろうか、などと私の頭の中では、授業の具体的内容ではなく、「学ぶとは」ということを考えていました。

私自身も日々研鑽のために、研修に参加することはあります。学びの多い研修というのは、その場で教わる新たな用語や新しい概念ではなく、聞いたことに興味をもて、研修が終わった後に、更に自ら知を深めるためたくなるものだと感じております。つまり、自分の知らなかったことが、自分の日々の暮らしと関係していることがわかった時です。一見、自分とは関係ないと思っていたことが、角度を変えてつながっていたり、関係していたり、それがわかると日常の見え方が変化します。見え方が変わることで行動の変化も起きます。良い研修、学びの豊かな研修と感ずるのは、その場の時間が終わったあとに何が起こるか、だと思っています。

人生は学びの連続であり、情報や知識を得ることだけが学びではないのです。という理屈を頭の中に成立させた時に、看護や福祉系ではない大学生に、私は何を伝えることができるのか。彼らの日常と高齢者や認知症や、地域福祉ということがどう関連して見えてくるだろうか、私に課せられたものは大きく感じました。そして、できることなら、授業を受けている学生が、興味なく内職しているのではなく、一つでも二つでも自分の今とこれからに関心を持つことができるといいなと思いました。

### 大学3年生の今と未来！

大学3年生と言ったら何に興味があるのだろうか？ 21歳前後の若者。私の狭い人生経験から真っ先に浮かぶのは、「恋愛」、というのは乏しい発

想かもしれません。でも、やはり、21歳の頃はよく遊び、恋をしていたのです。私の今の夫（今の、と言っても昔の夫がいるわけではなく、今も昔も夫は一人です。）との出会いも21歳の頃でした。たぶん、全員ではないにしても、多くの学生に「恋愛話」は通じるのではなかろうか、と考えました。高齢者や認知症への興味や理解の第一歩は「恋愛」という入口にしよう決めました。

授業は、薬学部の学生に80分を2回に分けて行うものです。1回目の授業では、高齢社会と認知症についての、一般レベルでの理解を目指しました。2回目は、薬学部として彼らが学んでいる今と将来に向けて、高齢者支援や地域福祉、薬剤師としてできることを学べるように考えました。その入口が「恋愛」です。これをどのように繋げていこうかと考えていました。その時に頭に浮かんだのが、当マガジンの執筆者でもある川崎二三彦先生の連載でした。川崎先生は、「映画の中の子どもたち」と題して、映画というツールを通して考える機会を発信されています。私はここにヒントを得、自分の授業でも映画というツールを使ってみようと思いました。

1回目の授業当日です。150名の学生が着席している教室は大きな教室でした。こちら側から、学生一人一人の様子がよく見えます。これは、なかなか厳しいと感じます。学生の表情が見えるということは、もしも授業に興味を示してくれなければ、80分という時間、私のモチベーションが維持できないような気がしたからです。何とか、興味をもってもらわなければ、私自身が授業に集中できません。

最初に使った動画は、「ばあちゃんの世界」という動画です。これは、小野薬品工業（製薬会社）が制作した認知症のドラマです。（\*youtubeで観ることができます。）8分程度の動画で、認知症の初期の様子や家族の揺れ動く気持ちなどが表されています。動画を流すと、学生の顔は一斉に画面の方を向いています。この日の授業後のアンケート

トでは、この動画により、認知症に対する理解が、本人の苦しみだけでなく、介護者家族の苦悩についても感じとることができたという記載がありました。百聞は一見にしかず、という諺がありますが、まさにそれです。認知症が起こる機序については、既に薬学部の授業で学んでいたようです。病態機序は理解していても、その病態がその人の生活や、周囲の人との関係にどのように影響していくのか、までは授業では触れていなかったとのことでしたので、この動画を利用したことは、認知症の人と介護する家族の人への現実的な理解につながったことと思っています。授業の間はずっと動画でというわけにもいかないのです。認知症についての一般的理解については、「認知症を理解するための8の法則と1原則」について伝えました。動画、そして知識としての学び。次につなげたいのは、21歳前後の学生の「今」です。ここで、登場するテーマが「恋愛」です。

「皆さんには、好きな人がいますか。大切に想う人がいますか。もしも、その大好きな、大切な人との今が、その人と自分の思い出にならなかつたら、どうしましょう？」下を向いていた学生の顔がこちらに向きます。この時に用意しておいたのは、次の動画でした。

- ・私の頭の中の消しゴム
- ・君に読む物語
- ・明日の記憶

本当は、映画を一本鑑賞して感想をディスカッションできるといいのですが、なかなかそこまでの時間がないために、この場合には、それぞれの映画の予告動画を流しました。それぞれ、2、3分の映画紹介です。これもまた、食い入るように学生の視線が映像に向けられます。

このようにして、1回目の授業80分は流れ、学生たちに何がどのように伝わったのか授業後アンケートを記入してもらい回収しました。アンケートには、幾人かの学生が自分の祖父母に認知症の人がいることを明かしていました。そして、今

までの対応にまずい点があったという振り返りをしていました。また、認知症の人と身近に接したことの無い学生は、授業で紹介した映画を早速観てみたいと記入してありました。また、認知症を取り上げた映画がこんなにもあることを始めて知った、という感想もありました。学ぶことで見え方が変わるひとつの成果だと思っています。認知症についての発生メカニズムを知ることも大切ではありますが、自分たちの普段選ばない映画の題材になっていることを知り、今まで選ばなかったものに興味を示し、それを手に取る、ここに行動変容があります。学びの成果だと感じます。その映画をじっくり鑑賞することで、私が80分では伝えられなかったことを、学生自身が自分の興味に向く方向へと知識と理解を広げていくと思います。

さて、2回目の授業です。2回目は、大学卒業後に薬剤師になる彼らに向けた、高齢者支援や地域福祉、薬剤師としての専門職としての役割理解につなげたいところでした。2回目の授業では私の普段の実践から具体的な地域の事例を伝えることにしました。「認知症フォーラムドットコム」というHPの動画の中に、「巡る季節～秋から冬～」という動画が公開されています。この動画は、2012年の夏の終わりから初冬にかけての約半年間、私が地域の高齢者の支援について取材を受けた動画です。認知症の高齢者が介護サービスを利用するだけではなく、長年続けてきた農作業を自宅ではなく、コミュニティ農園で行うという試みでした。農園では、介護サービスを受ける利用者ではなく、畑仕事を担う地域住民というスタンスです。この方の作った野菜が、地域レストランのメニューとして使われ、お客で来店した地域住民が食します。高齢期における喪失体験の連続の中、やや気持ちが沈みかけていた毎日に得意の畑仕事が再び生きがいとなり元気が取り戻せた実践です。18分ほどの動画ですが、学生は真剣に目を向けていました。動画の中で、どんどん表情が豊かに

なっていく高齢者の表情を逃さずに捉えていたことは、授業後のアンケートによく記載されていました。

そして認知症高齢者に限らずに、高齢者を支援しながら感じている現実を伝えました。例えば、高齢者と薬です。私はケアマネとして、30人前後の高齢者の担当をしていますが、その中で投薬を受けていない人は一人か二人です。あとは、定期的に受診し、なんらかの薬の処方されている方ばかりです。では、その処方された薬が指示とおりに服薬できているのか、ということを考えてみます。家族と同居をしていて、家族が薬をしっかり管理している人や、自身の健康管理に注意を払っている人は、服薬順守ができています。けれども、なかなか服薬が指示とおりにできていない人もいます。単に物忘れなどで薬の自己管理ができていないという問題ではなく、「飲まなくても大丈夫だから。」という理由の人もいるのです。処方された薬を飲まなくても本当に元気に暮らしている高齢者もいます。けれども、そのような方の多くは薬を服用していない事実を主治医に伝えることはしていません。その理由が「先生に悪いから。」ということも珍しくありません。医者がよかれと思って出してくれる薬を断るのは申し訳ないという理由です。医療は、命を守ろうとします。もちろんそれを望むからこそ、人は健康に不安があると医療機関へ足を運ぶのでしょう。けれども、命だけが優先されては、守られた命がどのように活かされるのか置き去りになってしまう場合があります。医療的な処置を受けることで、単に命が守られるだけでなく、その人にとっての暮らしの豊かさにどう反映させることができるのでしょうか。それを考えるにはどうすれば良いのでしょうか。そこが、医療の専門職や介護・福祉の専門職、そして専門家だけではなく、地域の生活者との手の取り合いが必要になってくるのです。

最後のまとめに使った動画は、映画「毎日がアルツハイマー」です。

この映画は、認知症の母を映画監督である関口氏が長編動画として記録したものでした。映画が出来る前に、youtube で公開されていた短編がたくさんあったので、その中からいくつかの動画を紹介しました。認知症の介護をとってもコミカルに描いたものです。介護する人が、関口監督のように、日常に起こるへんてこな事柄を笑い飛ばしながら介護していく、ということが出来るわけではありません。現実には、もっと壮絶な家族間の葛藤があることも多いでしょう。けれども、どんな状況の中にも、希望が見いだせるということを知っておくことも、生活者として或いは支援に携わる専門職としては大切だということを伝えました。

多くを語りすぎずに、高齢者実践の実際の動画と、認知症を取り上げた映画を使いながらの2回の授業は無事に終了しました。

2回目の授業後アンケートでは、認知症についてや、認知症の人、介護者の気持ちへの理解が進んだことがたくさん記入されていました。また、医療だけで、人を支えることはできないこと、薬剤師の関わり方の工夫や、医師と患者の橋渡しができる立場であること、地域住民の力を借りることの必要性も感想に書かれていました。

映画を使った授業が良かったという率直な感想や、離れた祖父母の顔を見に帰ろうと思いました、など学生の「今」と「これから」に、自分たちができることが十分に理解できていたことがわかりました。

「学ぶ」ということ。見え方が変わること。行動が変わること。「地域福祉論」という授業を受けた学生たちの行動が少し変化したことが伝わってきました。初めての大学での授業でしたが、情報の伝達で終わらずに行うことができたと思っています。

高齢者支援の現場にいるケアマネとして、できることが、また一つ増えました。